

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	岡田 了祐
学位授与の要件	学位規則第4条第1項2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>社会科学学習評価の方法論改革研究 ー構築型評価モデルによる多様な社会認識形成過程の保障ー</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教 授 棚 橋 健 治 審査委員 教 授 池 野 範 男 審査委員 教 授 木 村 博 一 審査委員 教 授 草 原 和 博 審査委員 教 授 小 原 友 行 審査委員 准教授 永 田 忠 道</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、社会学における調査手法である Grounded Theory Approach（以下、GTA）から示唆を得て、学習評価の新たな理論として構築型評価モデルを考案し、それを用いて、子どもの社会認識形成過程を考察するものである。様々な典型的社会科授業における子どもの多様な認識形成過程の特質を各々抽出し、各類型で明らかになった認識形成過程の特質について類型間を超えて比較考察することによって、授業観を超えた学習評価を行うという、社会科学学習評価の方法論改革について論じている。</p> <p>本論文の構成は、序章、終章を含め、8章からなる。</p> <p>序章では、本研究が求められる背景を述べるとともに、本研究の課題とそれを達成するための研究方法、意義を述べている。従来の社会科における学習評価研究は、社会科固有の学力を保障するために、目標の達成を図る評価に主眼が置かれてきたために、社会科固有の学力の明確化とそれを視点とした学習評価の実施が可能となった反面、子どもの多様な学びの実態が覆い隠されるものとなりがちであるととらえ、その問題点を克服するために、目標からの評価に加え、子どもの側からその学びの実態を説明する評価を併せて行うことにより、授業の改善や設計に資する評価を実現することが可能になると論じている。</p> <p>第1章では、基礎理論としてのGTAの教育評価への適用可能性について検討し、構築型モデルの提案と本研究において分析対象とする授業の類型設定について考察している。</p> <p>第2章では、事実に知識の量的な獲得を第一目標に据えた事実に社会認識形成型授業を取り上げている。事実に知識の定着度を測る試験結果から、4つの層に切り分け、そこから1名ずつ子どもを抽出し、それぞれどのような認識形成過程を辿り、なぜ差異が生じるのかに関して構築型評価モデルを使って分析している。</p> <p>第3章では、人物の生き方を通じた規範に対し、一定の共感的理解を示すことを第一目標に据えた共感的社会認識形成型授業を取り上げている。授業後の振り返りの記述を基に、①「事象に関して主観的に評価し、それを踏まえて社会への提案をしていた層」、②「事</p>			

象に関して客観的に評価し、それを踏まえて社会への提案をしていた層」の2つに切り分け、そこから1名ずつ子どもを抽出し、それぞれどのような認識形成過程を辿り、なぜ差異が生じるのかに関して構築型評価モデルを使って分析している。

第4章では、概念形成を第一目標に据えた概念的・社会的認識形成型授業として、様々な事象や因果を関連づけて帰納的に時代や地域等の特色を描き出そうとする授業、社会構造をとらえる説明枠である概念の修正と実証を通して演繹的に社会構造を把握しようとする授業、社会構造をとらえる説明枠である概念を帰納的・演繹的に獲得させてそれを別の事象に転移させようとする授業の3つのパターンを取り上げている。

第5章では、社会構造を踏まえて合理的に意思決定、価値判断することを第一目標に据えた概念的・価値的社会的認識形成型授業を取り上げている。授業後の合理的な意思決定ができていないか否かを測る記述の違いを基に、3つに切り分け、そこから、各層1名ずつ抽出し、それぞれどのような認識形成過程を辿り、なぜ差異が生じるのかに関して構築型評価モデルを使って分析している。

第6章では、授業類型ごとに分析してきたものを、授業類型の枠を取り払うことによって全て同じ検討の場へ上げ、再度、構築型評価モデルを使ってそれらを比較考察している。その結果、教師の想定以上の学びをする子ども、想定まで到達しない子どもがいるとともに、異なった授業類型にある授業においても、子どもたちの学びは授業類型に関わらず類似のものとなる場合があることも見いだされている。

終章では、それまでの分析・考察をもとに、構築型評価モデルによる社会科学習評価の方法論改革の可能性を論じている。本論文で提起された構築型評価モデルでは、子どもの認識の事実のレベルから問うていくことにより、教師の意図した一つの目標論の中にも複数の多様な認識形成が存在するという前提として、従来の評価論がもつ目標論に規定された閉ざされた評価という課題を克服する評価モデルとなり得ることを論じている。

本論文は、以下の点で評価できる。

第1に、従来の学習評価の多くが目標論からの評価であったために、特定の社会科学論の中で「こういう授業をすればこういう子どもたちが育つ」という“べき論”で語られ、多様な子どもの学びの実態を覆い隠してしまうという危険性も孕んでいるという重要な問題を指摘し、そのような危険性を回避するために、①社会科学固有の学力を視点としながらも、ある特定の立場の社会科学にとどまらない、②子どもの行動を説明し、その予測を可能とする、という2つの要素を併せ持つ新しい評価方法論の構築を試みていることである。

第2に、多様な子どもの実態が見える構築型評価モデルを導入することにより、その子どもたちにとって本当の意味で必要な指導や授業改善、設計はどのようなものかということをはっきりとさせることが可能となり、それにより、教師の目指すべき本来の目的をより達成できるような授業の改善点を見出すことも可能となることを明らかにしていることである。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

